

外国人 災害弱者にせぬ

「土砂崩れが起きる可能性があるので気を付けて」「常磐小はいつぱいなので保健センターに避難して」

岡山県に大雨特別警報が出た7月6日、フェイスブックを通じ、避難情報や避難所の場所を英語やポルトガル語、スペイン語で発信し続けた。

約6万9千人の人口のうち外国人が約1400人を占める総社市。今年4月、同市で外国人の生活相談などにのる職員として採用された直後、西日本豪雨に直面した。

行政の専門用語が理解しづらい外国人のため、支援物資の受け取りに付き添ったり、住宅再建の相談にのったり。

「罹災証明書や火災保険など書類関係のことはゼロから勉強しながらの対応でした」ブラジル・サンパウロの日本人街で生まれた。クラスメ

総社市職員 譚 俊偉さん(44)

1トの9割は日系人。家の近所では餅つきや七夕祭りが開かれていた。大学に通いながら航空会社に勤めていた1990年代前半、多くの日系人



たん・しゅんわい 1973年生まれ。父親は中国人、母親はイタリア人とスペイン人のハーフ。2年前に日本に帰化した。岡山市北区で妻と大学1年の長男、高校1年の長女、中学1年の次女と暮らしている。趣味はカラオケでミスターチルドレンやB♭の曲を歌うこと。外国人が交流するための市民団体「総社インターナショナルコミュニティ」を立ち上げ、3月まで8年間会長を務めた。

ルフ場でキャディーをしながら日本語を学んだ。同市の部品工場での通訳などを経て、総社市が募集していたポルトガル語の相談員に応募。2009年に嘱託職員となった。

災害を身近に感じるようになったのは11年。母国ブラジルが豪雨に襲われたことがきっかけだ。死者・行方不明者は1千人超。総社市が協定を結ぶ国際医療NGO「AMD A」（岡山市）の職員とともに現地に派遣され、医療や物資のニーズを聞き取りながら被災地を回った。

その2カ月後、東日本大震災が起きた。日本語がわからない外国人が被害にあって混乱したと知り、「外国人が災害弱者だと思われたくない。もっと勉強して『支援される側』から『する側』にならな

いと」との思いを強くした。13年、市が募集する「外国人防災リーダー」に手を上げ、市内の外国人に防災カードを配った。カードには「避

難所はどこですか」「助けてください」など、困った時に使う日本語を掲載。緊急連絡先や持病を書く欄を設けるなど、外国人が突然の災害に困らないよう工夫を凝らした。

西日本豪雨の際、県内で80代のブラジル人女性が浸水した自宅に一人で取り残されたと聞いた。「近所や地域とのつながりが薄くて取り残された人もいる。つながりがあれば声をかけあって一緒に避難できていたかもしれない」

避難所の場所を知らなかったり、パスポートのコピーを保管していなかったり、外国人の防災への備えは十分ではなかったとも感じた。

「『避難指示』『避難勧告』の意味が分からない人が多い。外国人が働く企業や日本語学校でも避難所の場所や日頃の備えを伝えるなど、もっといろいろな方法で防災情報が届くようにしたい」。次の災害に向け、備えを進める。